

詩  
篇

オ  
カ  
ト  
ラ  
ノ  
オ

六つのときだった。怖かった。

梅雨の夕暮れの

風の強い中、

母に手を引かれて

母の実家へ急いでいた。

田んぼの畦道で急に立ち止まって

母がうっとりしながら空を指さした。

「ほらっ」と。

かみなりさまの、あかりの中に

雲の切れ間から、大きな御殿が、見えた。

私は母にしがみついた。私は御殿よりも、母のとりつかれたような笑い顔が怖かった。∴∴実家に着いてからも、母の笑い顔はなおらなかつた。

母に狂気が入った。

怖かった。

縁側に転がって

シロのこと撫でていた。

「**なすておめえしゃべんねえのよう**」

猫を本気で怒りつけた。

シロは耳を寝かせて目を細めた。

納屋で父の怒鳴る声がひびいた。

「この薬っこ風っこ強え日ぬ

撒えでわがねえぞう」

母が何か言い返した。

「オカちゃんどごさ行ったあ、知やねえがあ。」  
夜中九時過ぎ、父の声がうわずった。

「いい、わらすはもう寝ろ。」

祖母の蒲団の中で  
じっとした。

窓の外で雨と風とが暴れていた。  
家中のガラスが震えて騒いでいた。

…母の名を呼ぶ大きな声  
ぶるっとして跳ね上がった。  
すぐに走った。

「痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ痛でえ」  
母が叫ぶ。

「どご痛でえどご痛でえってよう。」

父が怒鳴る。

「痛でえ痛でえ足痛でえ手痛でえ頭痛でえ  
みんな痛でえ」

泥でぶ濡れの顔しわくちゃにして

涙たらしてつばをっぺっぺして

じっとしていない。

病院に行ってから、

やっとのこと静かになって、

母は動かなくなつた。

サリンだダイオキシんだと、

騒ぐよほど前から、

その十倍も毒性のあるP O Pを、

農家ではいつも

手で撒いていた。……

私の村にはこの季節ヤマセがくる。

風がそりゃーっと吹くと、

わたしの目の前で、

母が舞い上がった。

白い着物を着て、  
白い顔をして、  
踊りながら上っていった。

二十歳のわたしの中に  
凶暴な奴がいて  
始まると止まらなくなる。  
治まるまでじっとする。  
そいつがだんだんと多くなっ  
て  
なくならない。

昼寝の時に  
鬼が出てくる。  
東京の小さなアパートの暗い角部屋に  
何匹も出た。  
ドアの内側に立って  
腰の碎けたクラゲのように  
ケタケタケタケタ笑って  
踊った。  
木刀で斬りつけるとさっといなくなっ

ケタケタケタケタケタツとまた現れた。  
見ると、外を犬が通ってゆく。  
腹の下をブラブラさせて  
悲しそうな目をして  
通りのメスを一匹ずつ犯していった。  
これでもかあこれでもかあ  
タラタラタラタラと汗をたらして  
その夢はいつまでも覚めなかった。

オカトラノオ

わたしの叫び声を聴け。

オカトラノオ

オカちゃんどごさ行ったのよう。

オカトラノオ

オトちゃんなぬすたのよう。

オカトラノオ

オラも御殿さ行くのよう。

オカトラノオは

叫んで

群れになって

疲れ果てて  
赤く染まってしまった。